

中部大学中部高等学術研究所
サステナブル流域水研究会第4回
藤前干潟保全の歴史と現状を学ぶ

於：藤前干潟藤前活動センター
2016年9月17日（土曜日） 潮位 12:14 32cm

概要

本研究会は、空間情報技術をツールとして、流域レベルで発生する水に関連する環境問題、特に、生活排水や肥料の流出などによって引き起こされる河川水、河川環境、地下水、海洋水汚染、さらに水処理問題への理解を深め、他研究機関との連携もとりながら中部大学研究者および学生間の情報共有（研究室間、学部間）と研究の深化を図ることを目的とし、2015年度－2016年度にかけて5回研究会の開催を実行、計画しています。

- 第1回東海地方における陸水の窒素循環・汚染の現状と課題（2015/11）、
- 第2回流域再生を目指した自然共生型環境管理と水の質的改善(2016/3)、
- 第3回都市・土地利用のデザインと水環境(2016/7)

の開催を受け、

「第4回藤前干潟保全の歴史と現状を学ぶ」

を開催します。流域水の最終地点に位置し、世界的にも貴重な藤前干潟の保全へリーダーシップを発揮されてきたお二人から貴重なお話を伺い、その後干潟に入って干潟の自然環境、動植物の生態を体験学習します。

プログラム

10:00 - 10:05	主催者挨拶
10:05 - 10:35	藤前干潟の埋め立て計画からラムサール条約登録・保全に至る経緯 寺井 久慈 (名古屋大学博物館 研究協力者／元中部大学応用生物学部環境生物科学科 教授) 名古屋市は1994年に藤前干潟をゴミ最終処分場として埋め立てる環境アセスを開始した。1997年のアセス準備書に対しては海外の20通を含め60件の意見書が出され、3回に及ぶ公聴会開催や、環境影響評価審査会から要請された追加調査を経て、「埋め立てが干潟環境に与える影響は少なくない」とする環境影響評価書が1998年に提出された。その後市民運動の盛り上がりや環境省の毅然とした態度により名古屋市は埋め立てを断念してゴミ行政を180度転換し、2002年に藤前干潟はラムサール条約湿地に登録された。
10:35 - 11:30	藤前干潟の現状と今後の展望 亀井 浩次 (NPO 法人 藤前干潟を守る会 理事長) 藤前干潟の保全を契機に名古屋市はごみ減量などの環境重視の政策をうちだすようになり、環境をテーマにした国際会議を誘致するなど、「環境都市」への道を歩みはじめた。「なごやの環境の原点」とされる藤前干潟だが、もちろん法的に保全されることがゴールではなく、良好な環境条件の維持、さらにはより広範囲な環境再生を実現するための不断の努力が必要である。保全確定後の藤前干潟の状況と今後の展望について考えたい。
11:30-14:00	現地見学＋生物観察説明（昼食は各自適宜） 亀井理事長、中部大学上野研サブリーダー
14:00	解散

講演者略歴

寺井 久慈

名古屋大学博物館 研究協力者

元中部大学応用生物学部環境生物科学科 教授

名古屋大学大学院理学研究科博士課程満期退学

名古屋大学水圏科学研究所助手、同大気水圏科学研究所助教授

中部大学応用生物学部環境生物科学科教授（2011年退職）

2010年より名古屋大学博物館研究協力者

亀井 浩次

NPO 法人 藤前干潟を守る会 理事長

趣味の野外活動を楽しむ中で自然保護問題に関心をもつようになり、1990年ごろより藤前干潟の保全活動に参加。「藤前干潟を守る会」ではおもに環境教育部門を担当。その他雑用全般。1999年の保全確定後は、会内の人材育成部門として「ガタレンジャー」の養成事業、およびスタッフ研修事業等を担当。2003年のNPO法人格取得後は、理事・副理事長、2012年より理事長という肩書きとなるが、実態はやはり雑用係である。専門領域は環境教育・環境思想・環境文学。トレッキング・カヌー・キャンプ等の野外活動インストラクター・自然ガイドも行う。本業は高校教員らしい。